

第7回日本臨床漢方医学会 漢方家庭医講習会

# 万病に潜む冷えの治し方

(医)(社)方伎会 理事長

石川友章

# 冷え・冷え性・冷え症

恒温動物は通常の体温を維持し、下がると低体温症と呼ばれる症状が発生することがある。ヒトの場合、風雨などでも簡単に起きてしまい35° C以下になると軽度の低体温症となり、30 - 25° Cで幻覚・錯乱が起き、それより低下すると死亡する危険が高まる。

西洋医学では、「冷え」は「冷え性」と書き、「冷え易い体質。血液循環の良くない身体」、従って病気ではなく「冷えに過敏な性質」とされて、病気とは考えられていなかった。

一方、漢方では、「冷え」は万病のもととなる「未病」と捉えられており、「冷え症」という。「冷え」は体質だからと思って放っておくと、さらに症状を悪化させ、万病の元になる。

生理的な冷えから、身体に蓄積された冷えが「冷え症」として多彩な症状として現れてくる。

# 冷えは機能を低下させる

身体が冷えるとあらゆる機能が悪くなる。

自律神経系、血行動態等に影響。

身体を冷やすとあらゆる所に痛みが出る。



頭痛、腹痛、関節痛、神経痛、生理痛等

身体が冷えると心も冷える。→不安感、焦燥感

# 冷えを惹起させる要因

外気温の変化(寒い所に身をさらし続ける)

気温から身を守る衣服や住居のあり方

内臓を冷やさないための食物のあり方

病気は、疲労と冷えが相関して起こる⇒

そのための睡眠の確保と睡眠の質の担保が必要である

# 漢方治療を受ける患者さんの食事 上の注意(1)

- 1、食べたくない時は食べないこと。
  - 2、よく噛み、少なめに食べること。腹七、八分目が良い。
  - 3、動きに応じた量を取ること。余り体を動かさない日は、少なめに食べましょう。
  - 4、なるべく季節のものを食べること。
  - 5、野菜、海草、(昆布、ワカメ、ヒジキ)、胡麻、大豆製品、(豆腐、おから、ゆば、高野豆腐)海草などのアルカリ性食品を、努めて食べましょう。
- 尚、野菜は火を通し「おひたし」や「煮付け」にして温めて食べましょう。

# 漢方治療を受ける患者さんの食事 上の注意(2)

- 6、小魚、煮干、ごまめ、魚の干物などは、丸ごと食べましょう。
- 7、食用油は、植物性のもの(ゴマ油など)を使いましょう。
- 8、肉類、卵、ハム、ソーセージ、バター、**白砂糖**、白米、などの酸性食品は、食べすぎないようにしましょう。白砂糖の代わりにミネラルを多く含むキビ砂糖や黒砂糖を用いましょう。
- 9、**身体の弱っている人は、なるべく生物や身体を冷やす食品を控えましょう。刺身などは温かいご飯やみそ汁と一緒に。**

# 漢方治療を受ける患者さんの食事 上の注意(3)

- 10、甘い物、果物、生野菜、清涼飲料水、アイスクリーム、刺身などは身体を冷やすため、なるべく控えましょう。
- 11、血圧の高い人は塩分をとりすぎないようにしましょう。
- 12、加工食品、色付食品、インスタント食品などの添加物の入っているものはなるべくさけましょう。
- 13、あらゆる食品には、それぞれの性質があり、長所も短所もあるので一品だけでこと足れりとするのは間違いです。バランスよく色々なものをとるようにしましょう。

良く嚙むことの重要性

小腸絨毛上皮内に

多数の $\gamma\delta$ T細胞が存在。

$\gamma\delta$ T細胞が皮膚・粘膜創傷修復  
に関与。

$\gamma\delta$ T細胞の活性化



1 「冷え」って何？



図1 冷えからおきる諸症状

「冷え度」のチェックシート

|    | 質 問                          | 点 数 |
|----|------------------------------|-----|
| 1  | 寒がり、電気毛布等の炎熱刺激を好む            | 9   |
| 2  | 生理痛、生理不順、月経困難症               | 8   |
| 3  | 子供なのに元気がなく外に出て遊びたがらない、飛び回らない | 7   |
| 4  | 手足が火照る                       | 7   |
| 5  | 低体温の傾向がある(36度2分以下)           | 5   |
| 6  | 冷房がきらい                       | 5   |
| 7  | 腰痛、腰が冷える。                    | 5   |
| 8  | 関節部、腹部、背中の中冷感                | 5   |
| 9  | レイノー現象(皮膚の冷感、チアノーゼ)          | 5   |
| 10 | 背中が寒気でゾクゾクする、腰や首回りが寒い        | 4   |
| 11 | 風邪を引きやすい。                    | 3   |
| 12 | 逆上せやすい、冷えのぼせっする。             | 3   |
| 13 | 尿が近く、色が薄い。又、量が比較的多い。         | 3   |
| 14 | 冷たい空気に当たるとすぐ鼻水が出る、出やすい。      | 3   |
| 15 | 浮腫みやすい                       | 3   |
| 16 | お腹が鳴ったり、痛むような感じがする。          | 3   |
| 17 | 消化不良の下痢、肛門の灼熱感のない下痢          | 2   |
| 18 | 便秘、兎糞状、便臭が少ない便               | 2   |
| 19 | 顔色が白い                        | 2   |
| 20 | 四肢又は下肢が冷える。あるいは痛む、怠い         | 2   |
| 21 | 寝付きが悪い                       | 2   |
| 22 | 温かいものを好んで食べる。                | 2   |
| 23 | 足の裏がカサカサして皮膚が割れやすい。          | 2   |
| 24 | 朝起きるのが辛い、主婦は朝食の支度が辛い         | 2   |
| 25 | 身体を冷やすと尿の出が悪くなる、色が薄い、回数が多い。  | 2   |
| 26 | 疲れ易い。                        | 1   |
| 27 | イライラして、怒りっぽい。                | 1   |
| 28 | 頭痛、肩こりのいずれかの症状がある。           | 1   |
| 29 | 夜何回もトイレに起きる。                 | 1   |
|    | 合 計                          | 点   |

評価 15～19点はひえはじめ、20～29点は冷え症になりかけ、  
30点以上は完全な冷え症

# 漢方的に冷え症をどう捉えるか？

体力のある人は寒さに対して直ぐ反応するから、衣服などで寒さ対策をする、ところが、虚弱体質な人や体力のない人は、寒さに対する反応が遅く、血管や筋肉が弱っているため、血管収縮等の寒さに対する防御が遅れ体温放出後に寒いと感ずるので、寒さのダメージは倍加し、冷えに繋がる。従って冷え症は虚証タイプの人に多く見られる。



### 体型

- 筋肉質の闘士型
- 固太り

### 皮膚

- 栄養状態良好
- 光沢・艶あり, Turgor 良好

- 声が力強い

### 筋肉

- 弾力的で緊張よく発達

### 腹部

- 腹筋は厚みがあり弾力的
- 上腹角が鈍角的
- 上腹部季肋部の筋緊張が著しい者あり(胸脇苦満).

### 消化器症状

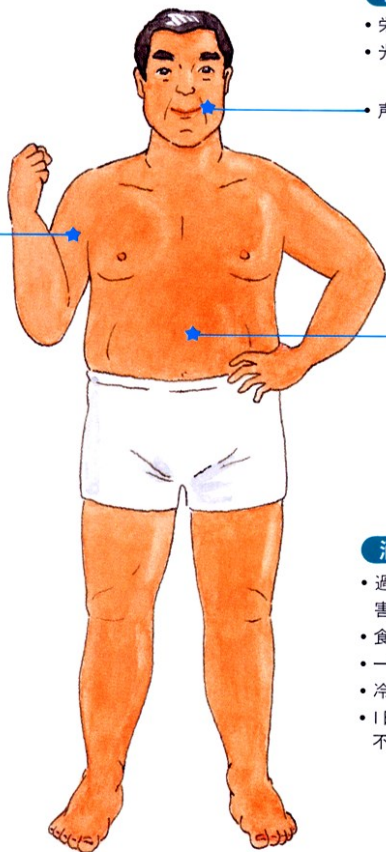
- 過食しても胃腸障害が起こりにくい
- 食べるのが速い
- 一食抜いても平気
- 冷たい物も平気
- 1日でも便秘すると不快

### 体温調節

- 夏は暑がるが活動的
- 冬は比較的寒がらない
- 通常、寝汗はかかない

### 薬剤に対する反応性

- 大黃, 麻黄, 黄連, 石膏などを含む処方を使用可能.
- 附子, 人參, 乾姜などで不快な作用が出やすい.



### 体型

- やせ型の下垂体質が多い
- いわゆる「水太り」には虚証が多い

### 皮膚

- 栄養状態不良
- 光沢・艶なし, Turgor 不良

- 声が弱々しい

### 筋肉

- 弾力・緊張ともに不良で発達悪い

### 腹部

- 腹筋は薄く全体に軟らかく緊張に欠ける
- 腹直筋が棒状に突っ張っている時あり
- 上腹角が鋭角的
- 心窩部拍水音を聴いたり, 大動脈拍動を触れる

### 体温調節

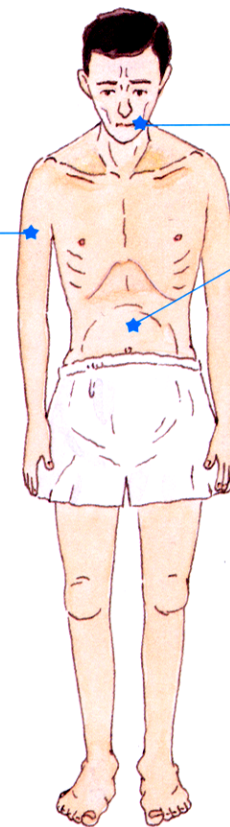
- 夏の暑さに弱い
- 冬の寒さに弱い
- 寝汗をかきやすい

### 消化器症状

- 過食すると不快で、嘔吐、下痢しやすい
- 食べるのが遅い
- 空腹で脱力感を覚える
- 冷たいもので腹痛・下痢を起こしやすい
- 数日排便がなくても平気

### 薬剤に対する反応性

- 大黃, 麻黄, 黄連, 石膏などを含む処方では不快な作用が出て使用できない.
- 附子, 人參, 乾姜などを含む処方の有効な者が多い.
- 鎮痛剤, 抗炎症剤, 抗生剤で胃腸障害が起こりやすい.



# 実証

# 虚証

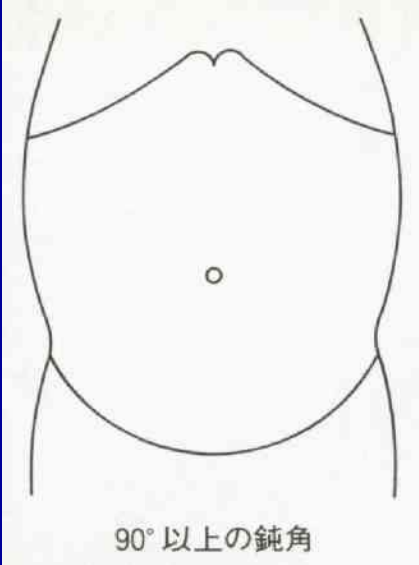
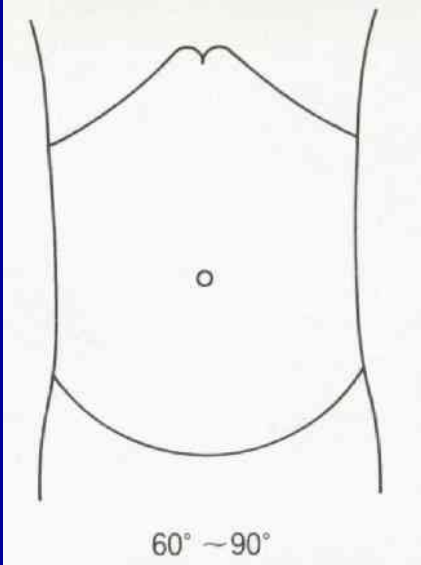
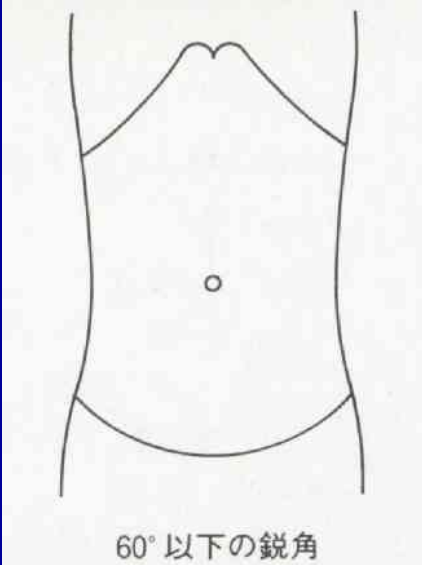
# 虚実

|     | 虚             | 実        |
|-----|---------------|----------|
| 体力  | 低下            | 充実       |
| 体格  | 悪い 筋骨薄弱       | 良い 筋骨発達  |
| 筋肉  | 軟弱            | 緊張が良い    |
| 音声  | 低い            | 張りがある    |
| 腹部  | 腹壁薄く、全体の緊張が弱い | 全体の緊張が強い |
| 脈証  | 小・細・微などで、力が弱い | 力がある     |
| その他 | 静かで、疲れやすい     | 行動的      |

# 体格による虚実

|     | 実証                        | 虚証                        |
|-----|---------------------------|---------------------------|
| 肥満型 | がっしりして、栄養状態が良く、筋肉がしまっている。 | 肉にしまりがなく、いわゆる水ぶとりで、骨格が細い。 |
| 痩せ型 | 筋肉がしまって行動的。               | 顔色がさえず、骨格が細い。(陰証)         |

# 上腹角と腹壁による虚実の判定

|        | 実 証                                                                                               | 実証～虚実間証                                                                                           | 虚 証                                                                                                 |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 上腹角    |  <p>90°以上の鈍角</p> |  <p>60°～90°</p> |  <p>60°以下の鋭角</p> |
| 腹壁の緊張度 | 緊張がよく、弾力がある。                                                                                      | 緊張が中等度、弾力がある                                                                                      | 緊張力が弱く、軟弱なもの。                                                                                       |
| 腹壁の厚み  | 厚い                                                                                                | 中等度                                                                                               | 薄い                                                                                                  |

| 腹部の体温    | 証                      |
|----------|------------------------|
| 腹部全体が冷たい | 冷え性で、陰証。               |
| 上腹部が冷たい  | 中焦の寒虚。胃が冷えており、人参湯などの証。 |
| 下腹部が冷たい  | 下焦の寒虚。真武湯、当帰芍薬散などの証    |



| 腹 症    | 虚     | 虚实間   | 实     |
|--------|-------|-------|-------|
| 胸脇苦満   | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ |
| 心下痞硬   | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ |
| 腹皮拘急   | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ |
| 腹部動悸   | ■ ■ ■ | □ □ □ |       |
| 心下部振水音 | ■ ■ ■ | ■ ■   |       |
| 瘀血     | □ □   | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ |
| 小腹不仁   | □ ■   | ■ ■ ■ | ■ ■ ■ |
| 小腹拘急   | ■ ■ ■ |       | □ □ □ |
| 蠕動不穩   | ■ ■ ■ |       |       |
| 心下痞堅   | □ □   | ■ ■ ■ |       |
| 正中芯    | ■ ■ ■ |       |       |
| 臍痛点    |       | ■ ■ ■ |       |

# 聞診

|            | 実証            | 虚証  |
|------------|---------------|-----|
| 音声         | 大きい           | 小さい |
| 胃内停水       | —             | ある  |
| 排泄物<br>分泌物 | 臭気が強い<br>(瘀血) | —   |

# 病態(の性質)を示す尺度と治療

| 尺度 | 病態(証) | 治法   | 治療薬   |
|----|-------|------|-------|
| 虚実 | 虚     | 補    | 補剂    |
|    | 実     | 瀉    | 瀉剂    |
|    |       |      |       |
| 寒熱 | 寒     | 温    | 温薬    |
|    | 熱     | 寒(涼) | 寒(涼)薬 |
|    |       |      |       |

# 慢性症における虚実の臨床的鑑別1

|         |  | 実 証                                    | 虚 証                                                    |
|---------|--|----------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 体 型     |  | 筋肉質、闘士型<br>固太り                         | やせ型、下垂体質<br>“水太り”                                      |
| 活 動 性   |  | 積極的、疲れず                                | 消極的、疲れやすい                                              |
| 心身の状態   |  | 余裕あり                                   | 余裕なし                                                   |
| 栄 養 状 態 |  | 良好                                     | 不良                                                     |
| 皮 膚     |  | 光沢・つやがある<br>緊張が良い                      | さめ肌、乾燥傾向<br>緊張が不良                                      |
| 筋 肉     |  | 弾力的で緊張よい<br>発達良好                       | 弾力性がない<br>発達不良で薄い                                      |
| 腹 部     |  | 弾力的<br>筋肉が厚い<br>心窩部拍水音なし<br>胸脇苦満が現れやすい | 軟弱または硬直性<br>筋肉が薄い<br>心窩部拍水音あり<br>(胃下垂で胃液貯留)<br>大動脈拍動触知 |

# 慢性症における虚実の臨床的鑑別2

|                | 実 証                                  | 虚 証                                                    |
|----------------|--------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 消化吸収能          | 食事速く大食傾向<br>一食抜いても平気<br>冷飲食可<br>便秘不快 | 食事遅く、食が細い<br>空腹時脱力感<br>冷たい食物で腹痛下痢<br>便秘平気<br>軟便下痢傾向、兔糞 |
| 体 温 調 節        | 夏ばてしない<br>冬に強い                       | 夏ばて<br>冬の寒さに弱い<br>四肢末梢冷える                              |
| 声<br>そ の 他     | 力強い<br>寝汗（－）                         | 弱々しい<br>寝汗（＋）<br>食後の倦怠感・眠気<br>口乾                       |
| 薬 物 へ の<br>反 応 | 麻黄・大黄が有効<br>人参・乾姜でのぼせ                | 麻黄・大黄で副作用<br>人参・乾姜が有効                                  |

# 陰陽

|    | 陰         | 陽         |
|----|-----------|-----------|
| 病状 | 静的 沈降性 寒性 | 動的 発揚性 熱性 |
| 症状 | 現れにくい     | 顕著に現れる    |
| 顔色 | 蒼白        | 赤み        |
| 脈証 | 沈遅・弱・細・微  | 浮数・大・滑・洪  |
| 傷寒 | 寒証        | 熱証        |

# 寒熱

|      | 寒     | 熱                  | 真寒仮熱   |
|------|-------|--------------------|--------|
| 悪寒熱感 | 悪寒    | 熱感<br>(悪寒を伴う場合もある) | 熱感が少し  |
| 顔色   | 蒼白 鼻汁 | 赤み                 | 赤み     |
| 手足   | 冷たい   | 熱い                 | 冷たい    |
| 脈証   | 沈     | 浮、または沈             | 沈微[浮弱] |

# 病因

外因と内因、五邪七情、不内外因によって  
発症する。

|      |               |
|------|---------------|
| 外因   | 風・寒・暑・湿・燥・(熱) |
| 内因   | 喜・怒・憂・思・悲・恐・驚 |
| 五臓   | 心・肝・脾・肺・腎     |
| 三毒   | 気・血・水(水毒)     |
| 不内外因 | 飲食倦勞・不摂生・中毒   |



# 気・血・水の概念

生体の異常を説明する生理的因子として、  
気・血・水という概念が用いられている。

「気は、形がなくて働きだけがあるもの。」と  
説明されている。

気の異常は心と身体を結ぶ機能系の異常  
を指し、上昇、変動により症状が変化する。

血は現象的には血液とその代謝産物であ  
り、全身を巡り、気の制御を受ける。

水は血から別れたものであるから、停滞、  
下降の性質を帯びる。停滞を水毒という。

# 気血水の異常

|      |    | 使用目標                                | 治療・使用処方                          |
|------|----|-------------------------------------|----------------------------------|
| 気の異常 | 上衝 | 頭痛、動悸、めまい、<br>冷えのぼせ、顔面紅潮            | 桂枝湯類                             |
|      | 気鬱 | 抑うつ気分、不安、<br>のどのつまる感じ、              | 半夏厚朴湯、香蘇散、                       |
|      | 気虚 | 意欲障害、食欲不振、<br>消化吸収機能低下              | 補中益気湯・十全大補湯など<br>の参耆剤、四君子湯類      |
| 血の異常 | 瘀血 | 月経異常、腹部膨満感、<br>腹部の圧痛、皮膚粘膜鬱血         | 桃核承気湯、大黄牡丹皮湯、<br>桂枝茯苓丸、          |
|      | 血虚 | 皮膚乾燥・色素沈着、貧血<br>易疲労                 | 四物湯類(十全大補湯、キュウ<br>帰膠艾湯、大防風湯など)   |
| 水の異常 | 水毒 | 浮腫、尿量の過多過小、<br>水様性鼻汁、関節痛、頭痛<br>めまい、 | 五苓散、防已黄耆湯、小青竜湯、<br>麻黄附子細辛湯、真武湯など |

1 「冷え」って何？

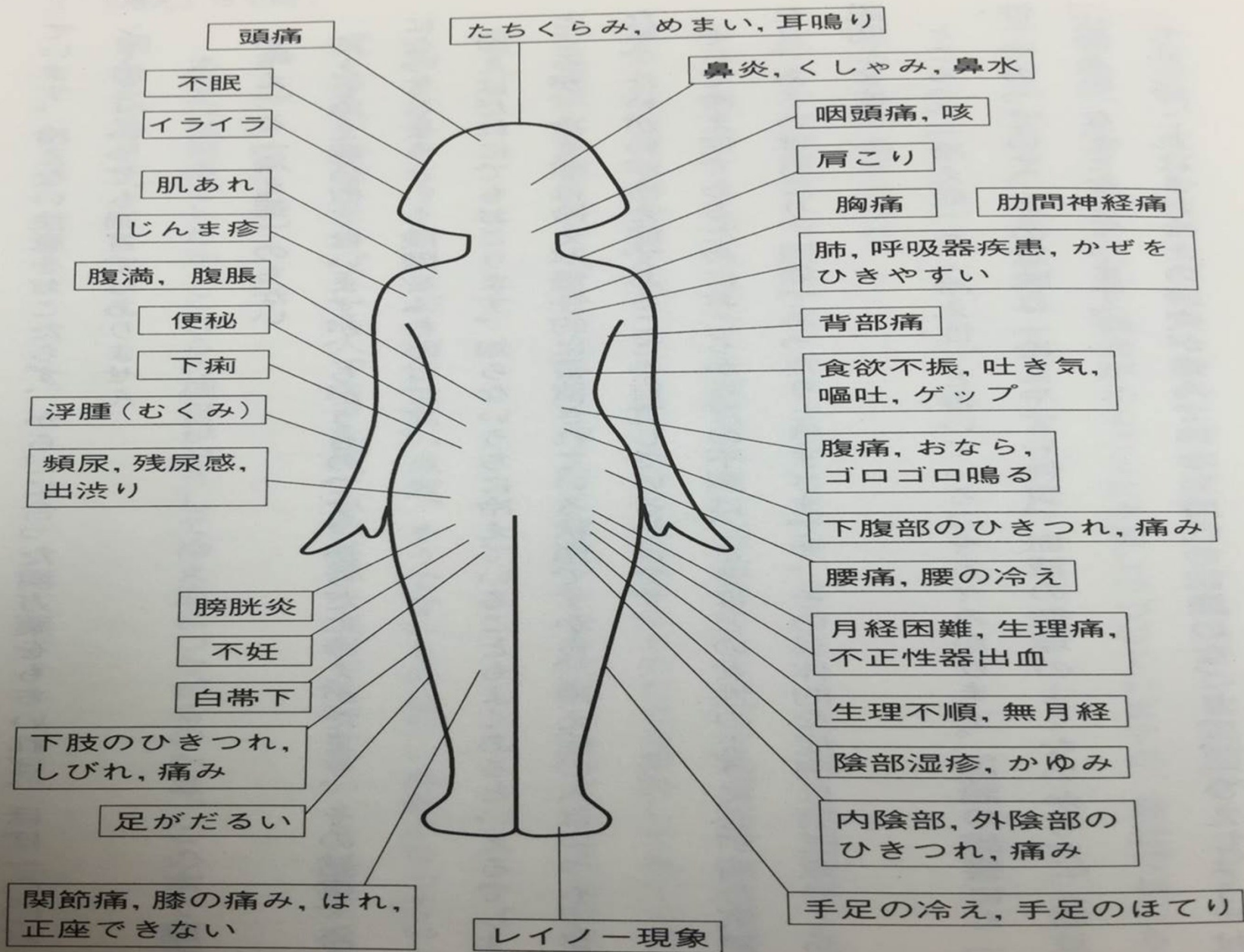


図1 冷えからおきる諸症状

# 気血水の異常と治療

| 要素病態 | (証)    | 治療方剤    | 対応生薬    |
|------|--------|---------|---------|
| 気    | 気逆(上衝) | 順気剤     | 順気薬     |
|      | 気鬱     |         |         |
|      | 気虚     | 補気剤     | 補気薬     |
| 血    | 駆瘀血    | 駆瘀血剤    | 瘀血薬     |
|      | 血虚     | 補血剤     | 補血薬     |
| 水    | 水毒(水滯) | 駆水(利水)剤 | 駆水(利水)薬 |

# 顔色と証

| 証     | 顔色                          |
|-------|-----------------------------|
| 陽(熱)証 | 赤み                          |
| 表熱証   | 全体が紅潮<br>(桂枝湯証、麻黄湯証)        |
| 裏熱証   | 全体が紅潮<br>(三黄瀉心湯証、黄連解毒湯証)    |
| 瘀血証   | 毛細血管が網目様に透けてみえる。<br>紫赤色で汚い。 |





94 4 20









# 治療の順序

- (1)「虚を補って後に実を攻める」(先虚後実)
- (2)「表を治して後に裏を攻める」(先表後裏)
- (3)「表裏同時に治療する」
- (4)「虚実の判定に迷う時は虚として治療せよ」
- (5)「慢性病の治療中に、急性病を併発した時は、先ず、急性病を治療せよ」

# 治療法の原則

|          | 内容                                         |
|----------|--------------------------------------------|
| 汗(汗法・汗解) | 発汗させて、体表から病邪(熱)を発散させる。                     |
| 吐(吐法・吐方) | 半表半裏の寒を、吐出させる。現在瓜蒂がないため行われていない。            |
| 下(下法・下方) | 裏の実熱を瀉下によって放熱する。                           |
| 和(和法・和方) | 病邪が半表半裏に進んで、汗・下を使えないときに、穏やかに熱を冷ます。         |
| 清(清熱)    | 三陽合病(表・半表半裏・裏にいずれも熱邪がある病態)の場合、石膏、知母で熱を冷ます。 |
| 温(温補)    | 体力が低下し、表または裏に寒邪があるものに、附子、人參、乾姜で、からだを温め補う。  |

# 虚証とは

- 気虚、血虚、脾胃の虚、腎虚など
- 一瞬に体力、気力がなく、闘病反応も鈍く、強い治療には耐えられないものをいう。
- 体格 痩せ型で、内臓下垂タイプ
- 疲れやすく、消極的
- 筋肉に締まりがなく、腹部は軟弱無力
- 食が細く、空腹時に脱力感があり、食後すぐ眠くなる。  
冷たいものを食べると腹痛下痢を起こす。軟便下痢傾向
- 声は弱々しく、心に余裕がない

# 虚証の腹証の特徴

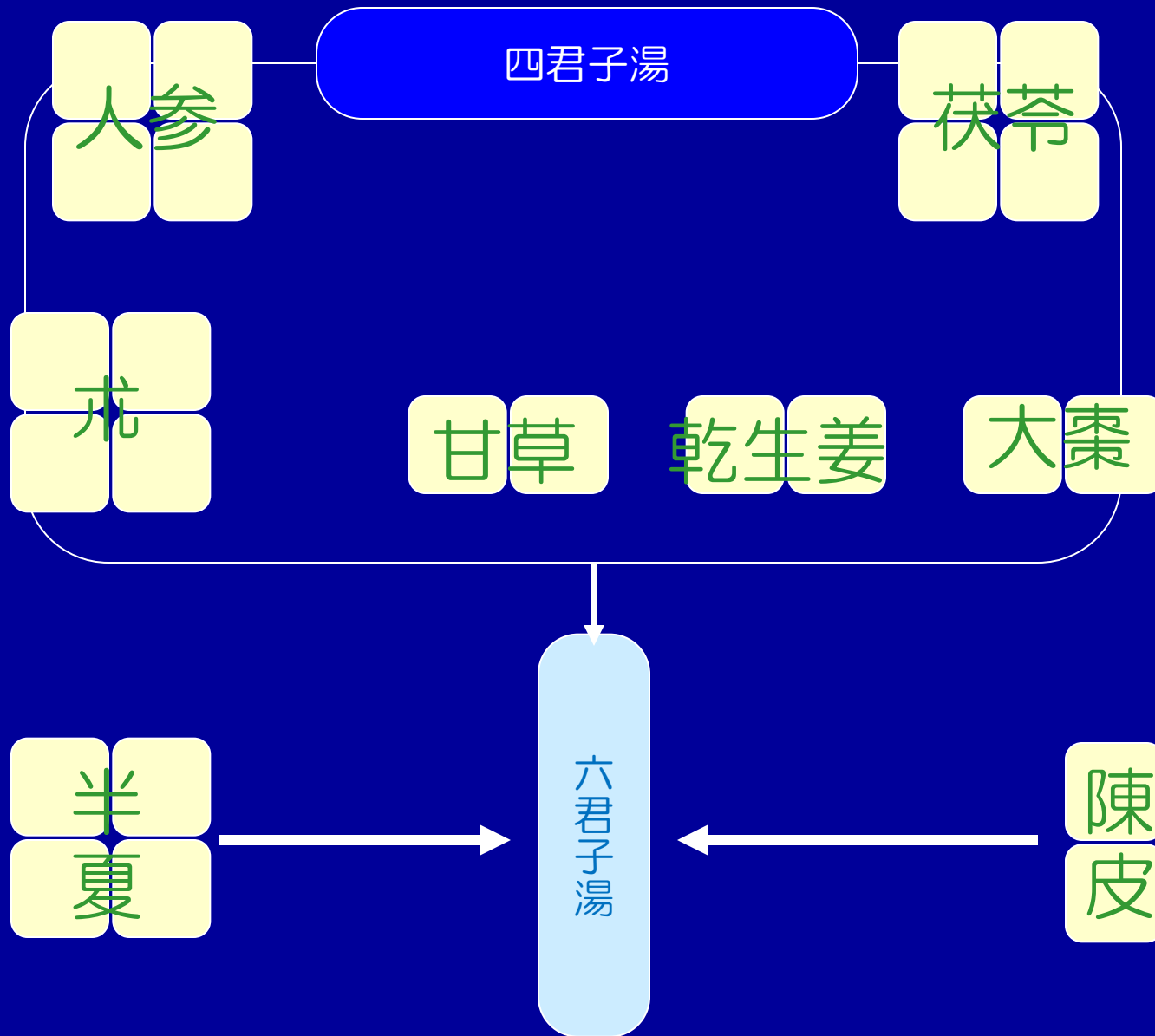
- 腹部は軟弱無力
- 振水音が聞かれる
- 腹部動悸
- 腹直筋の攣急
- 小腹不仁
- 正中芯
- 触診でくすぐったい

# 疲労・倦怠

【治療のポイント】疲労・倦怠の多くは、脾虚または気虚によるもので、ときに気鬱が原因には「精神症状」のページを参照されたい。

なお、ここでは補薬を主として用いているが、証によってはかえって瀉剤が必要なこともある。それらはそれぞれの証に従って、治療する。

|    |      |                |  |            |
|----|------|----------------|--|------------|
| 陽証 | 中間証  | 〔脾虚、食後の倦怠感・眠け〕 |  | ①半夏白朮天麻湯   |
|    |      |                |  |            |
|    |      | 〔精神疲労に頻服及び連用〕  |  | ②清暑益気湯     |
|    |      |                |  |            |
|    | 虚証   | 〔気鬱・瘀血・水滯を兼ねる〕 |  | ③加味逍遙散     |
|    |      | 〔脾虚、胃腸虚弱〕      |  | ④六君子湯      |
|    |      | 〔気虚、大病後、慢性疾患〕  |  | ⑤補中益気湯     |
|    |      | 〔脾虚、胃腸虚弱甚だしいも  |  | ⑥四君子湯      |
|    |      | 〔虚弱体質、裏急〕      |  | ⑦小建中湯      |
|    | (実証) | 〔気・血両虚〕        |  | ⑧十全大補湯     |
|    |      | 〔腎虚〕           |  | ⑨八味地黄湯・八味丸 |
|    |      | 〔脾虚に裏寒を兼ねる〕    |  | ⑩附子理中湯     |
| 陰証 | 虚証   | 〔虚弱体質、裏寒・水滯〕   |  | ⑪真武湯       |



# 六君子湯

人參・白朮・茯苓・半夏 各4.0、陳皮・大棗 各2.0、  
甘草 1.0、乾生姜 0.5

胃腸が虚弱で食欲がない、あるいは慢性の下痢傾向があり、もしくは体内に熱感を覚え、あるいは食べた物が不消化で過酸症状がある等の症状によい。本処方方は四君子湯に半夏と陳皮を加えたものである。



# 六君子湯の適応症状

食欲不振

疲労倦怠

肩凝り

便秘ときには下痢傾向

口臭

帯下

# 六君子湯の使用目標

(1) 全体的には生気の減退。

元気が出ない。疲れ易い。太らない、痩せる。

(2) 局所的には消化機能の衰退。

食欲がない。食べ物が食べられない。少し食べてもすぐに満腹になる。食べた物が何時までの胃に停滞してなかなか腹が空かない。便通が良くない(快通しない、軟便が治らない等)。

(3) 脾虚の証。

睡眠の異常で、夜の寝付きが悪い、寝ても眠りが浅くて目が覚めやすい、朝早く目が覚めてしまう、等と言うものや、その反面、朝は眠くて起きるのが辛い、夜も良く寝れるし、寝ても寝ても眠い、と言うものである。こういう人は昼間、食事の後等で酷く眠くなることが多い。これらの症状は、自律神経失調ばかりでなく、やはり消化力の低下によるものと考えられる。

# 六君子湯の適応病名

心臓弁膜疾患

急性胃炎・慢性胃炎

胃アトニー症・胃下垂症

胃酸過多症及び胃散過少症

胃拡張

胃腫瘍

胃癌

慢性胃腸炎

クル病

虚弱児童

脱肛及び直腸脱

帯下

口腔疾患・口内炎・舌炎

冷え症

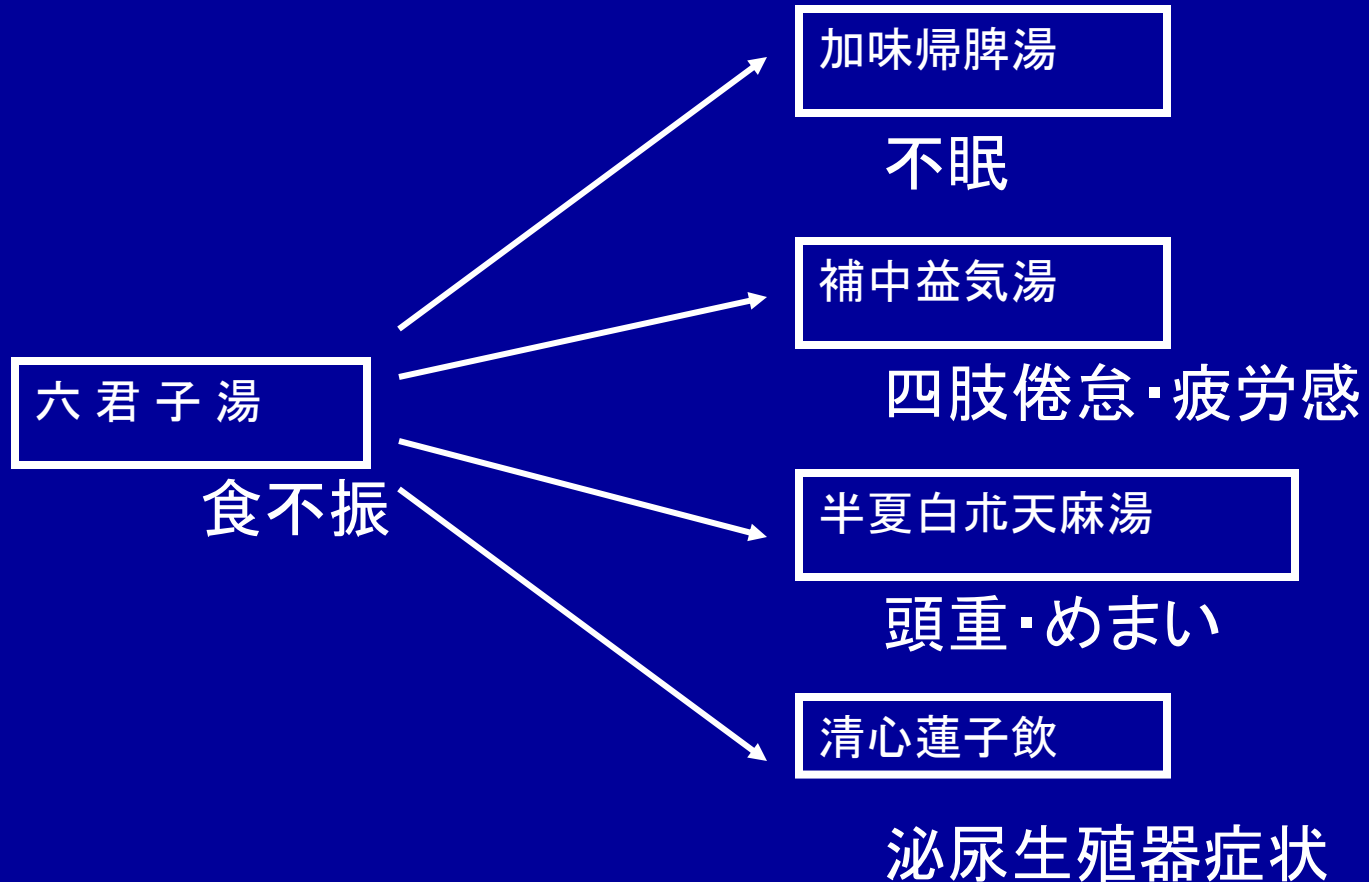
肝炎・肝硬変

慢性腹膜炎

神経症

悪阻

# 六君子湯とその近縁処方



# 代表的な参耆剤の構成生薬<sup>(1/2)</sup>

|       | 参耆 | 白朮 | 甘草 | 茯苓 | 当帰 |                            |
|-------|----|----|----|----|----|----------------------------|
| 補中益気湯 | ●  | ●  | ●  |    | ●  | 陳皮 大棗 柴胡 乾姜 升麻             |
| 清暑益気湯 | ●  | ●  | ●  |    | ●  | 麦門冬 黄柏 五味子                 |
| 十全大補湯 | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | 川芎 熟地黄 芍薬 桂枝               |
| 清心蓮子飲 | ●  |    | ●  | ●  |    | 麦門冬 蓮肉 車前子 地骨皮             |
| 帰脾湯   | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | 酸棗仁 龍眼肉 遠志 大棗 木香 生姜        |
| 加味帰脾湯 | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | 酸棗仁 龍眼肉 遠志 大棗 木香 生姜 柴胡 山梔子 |
| 人参養栄湯 | ●  | ●  | ●  | ●  | ●  | 熟地黄 桂枝 芍薬 遠志 五味子 陳皮        |

# 代表的な参耆剤の構成生薬<sub>(2/2)</sub>

|         | 参耆 | 白朮 | 甘草 | 茯苓 | 当帰 |                                           |
|---------|----|----|----|----|----|-------------------------------------------|
| 半夏白朮天麻湯 | ●  | ●  |    | ●  |    | 半夏 陳皮 蒼朮 麦芽 天麻<br>黄柏 神麴 沢瀉 生姜 乾姜          |
| 当帰湯     | ●  |    | ●  |    | ●  | 半夏 厚朴 桂枝 芍薬、乾姜<br>蜀椒                      |
| 大防風湯    | ●  | ●  | ●  |    | ●  | 川芎 防風 杜仲 附子 芍薬<br>羌活 牛膝 大棗 乾姜 熟地黄         |
| 千金内托散   | ●  |    | ●  |    | ●  | 川芎 防風 桔梗 厚朴 桂枝<br>白芷                      |
| 十六味流気湯  | ●  |    | ●  |    | ●  | 川芎 防風 桔梗 厚朴 桂枝<br>白芷、木香 芍薬 烏薬 檳榔<br>枳殻 蘇葉 |

# 補中益気湯(ほちゅうえっきとう)

黄耆・人参・朮 各4.0、当帰 3.0、陳皮・大棗 各2.0、  
甘草 1.5、柴胡 1.0、乾姜・升麻 各0.5

## 1. 原典の指示

[原典] 『内外傷弁惑論』(李東垣<sup>りとうえん</sup>)

[本文] 原典の『内外傷弁惑論』および『脾胃論』の文は  
冗長であり、ここでは他の医書の指示を紹介する。

## (1) 津田玄仙『療治經驗筆記』卷之一 (1/2)

「此の方を広く諸病に用ゆる目的は、

[第一手足倦怠]

倦怠とは手足の落ちる様にかいだるく、力なきを云う。

[第二語言輕微]

語言輕微には、語言は朝夕のものいいのこと也。輕微とは“かるくかすか”とよむ字にて、語言のたよたよといかにもちからなく、かるくかすかにして、よわよわと聞ゆる症を云う也。

[第三眼勢無力]

眼一応にみれば朝夕の如くに見ゆれども、よく心をつけてみれば目の見張り、くたりとして、いかにもちからなくみゆるを云う。

[第四口中生白沫]

白沫とは病人食中にいれてかむときに口あたりに白沫生ずるものなり。(中略)

[第五食失味]

(略) 甘きものも酸ものも苦辛も口中にて分からず、皆糠すくほをかむが如くにて、不食する、これがここに云う所の食不味と云うもの也。(略)



## (1) 津田玄仙『療治經驗筆記』卷之一 (2/2)

### [第六好熱湯]

脾胃虚して益氣湯の慶ずる証は何程熱ありても口には煮たちたる物を好むものなり。是れは脾胃虚の上に冷をかねたるもの多し。此の時は益氣に附子を加えてよきはと知るべし。

### [第七当臍動氣]

益氣湯の応ずる脾虚の証は臍のぐるりを手に以て按じみるに、必ず動氣甚だしきものなり。若し、動氣うすきものは脾胃の虚のかるきものなり。

### [第八脈散大而無力]

散は脈のはっと散りひろがりて、しまりのなき脈をいう。大は太くざとる脈なり。指を浮ては散ひろがりて太くうてども指を沈めてみれば、力弱くうつを散大而無力というなり。

○手足倦怠の一つは益氣湯の八つの目的の中にても肝要の中の肝要なり。故に今日治療中の中に於て外七つも目的が揃うても、手足倦怠の一つがなくば益氣必定の証とは究めがたきこともあるものなり。是れは益氣湯を用いる一つの心得なり。(略)」

# 医王湯 即内外傷辨補中益氣湯(1/2)

治脾胃乃傷、勞役過度、損耗元氣、見熱頭痛或湯不止、不任風寒、氣高而喘、又治  
發汗後二三日、脈芤、面赤、惡熱、或下利二三行、舌上有胎、或無胎而不欲食、喜  
熱飲、食難進、重者不寢、問有譫語妄言、眼目赤、

黃耆 甘草 人參 升麻 柴胡 橘皮 當歸 白朮

右八味、加麥門冬五味子冬味麥益氣湯、又稱胃王合生脈、加乾姜附子、名姜附益氣  
湯、加芍藥茯苓名調中益氣湯

# 医王湯 即内外傷辨補中益気湯(2/2)

此方元来東垣建中湯十全大補湯人参養栄湯などを差略して組立し方なれば後世家にて種々の口訣あれども畢竟小柴胡湯の虚候を帯ぶる者に用うべし。補中だの益気だの升提たのと云う名義に泥むべからず。其の虚構と云うものは第一手足倦怠、第二語言輕微、第三眼勢無力、第四口中生白沫、第五失食味、第六好熱物、第七当臍動気、第八脉散大而無力等八症の内一二症あれば此方の目的となして用う。其の他薛立斎が所謂飲食勞役而患虐痢等証因脾胃虚而久不能愈だ龔雲林の所謂気虚卒倒中風等症因内傷者だのと云う処に着眼して用うべし。前に述ぶる通り少陽柴胡の部位にありて内傷を兼ねる者に与うれば間違いなき也。故に婦人男子共に虚勞雜症に拘らず此方を長服し効を得ることあり。婦人には最効あり。又諸痔脱肛の類疲れ多きものに用う。又此症にして煮たてたる熱物を好むは附子を加うべし。何ほど渴すといえども附子苦しからず。

### (1)『万病回春』・外傷内傷証弁

内傷労役は元気の虚損なり。(補中益気湯は)形神労役し、或は飲食節を失し、労役虚損し、身熱して煩し、脈洪大にして虚、頭痛み、或は悪寒して渴し、自汗無力、気高くして喘するを治す。(略)

### (2)『医療衆方規矩』

中気の不足、飲食労倦し、清気下陷し、以て脾胃虚弱、発熱頭痛、四肢倦怠、心煩し肌瘦せ、日に日に漸く羸弱するを治す。此の薬は能く元気を升し、虚熱を退け、脾胃を補い、気血を生ず。

### (3)『勿誤藥室方函』(浅岡宗伯)・医王湯

脾胃乃ち傷れ、労役過度、元気を損耗し、心熱頭痛或は渴止まず、風寒に任えず、気高くして喘するを治す、又、発汗後二三日、脈芤、面赤く、悪熱、或は下利二三行、舌上胎有り、或は胎無くして食を欲せず、熱飲を喜み、食進み難く、重き者は寝ず、問えば譫語妄言有り、眼目赤きを治す。

# 万病回春に見られる症状

[類中風の証] 気虚の卒倒を治す。

[内傷] 内傷労役は元気の虚損なり。

心身の疲労倦怠 食欲不振 頭痛、悪寒、口渇、喘鳴 多汗、不眠、頭疼、くしゃみ、脳痛、頭頂痛、口乾、口渇、痰、下痢、心胸痞悶、咳嗽、額疼、夢遺 下部力なきもの 眼赤きもの、眼痛、気短

[呃逆](吃逆) 発呃 [発熱] 潮熱

[補益] 感冒 [淋証] 淋症

[脇痛] 脇下痛 [痘瘡] 結痂して後、発熱悪寒する。

# 補中益気湯で治る疾患 (1/3)

卒倒、半身不随、ナルコレプシー

食欲不振(胃腸虚弱)、胃アトニー、胃下垂

疲労倦怠、夏まけ、夏痩せ、眼精疲労

一般的な肉体疲労者の体質改善、脱毛

感冒、気管支炎、肋膜炎、肺結核、微熱

慢性肝炎、肝硬変                      盗汗、多汗症

小児ネフローゼ                      肩凝り

痔疾患、ヘルニア                      男性不妊症、インポテンツ

蕁麻疹                      マラリア

月経異常、流産止め、出産後の脱毛                      慢性下痢症

# 補中益気湯で治る疾患 (2/3)

## 加減方及び合方

加 茯苓、芍薬＝補中益気湯

慢性腹膜炎(腹満、腹痛)

加 黄柏 丸剤にて使用

手足の煩熱－不眠症

加 麦門冬、五味子＝味麦益気湯

咳嗽の多いものの肺結核や虚弱者の気管支炎

加 附子

出血

加 赤石脂＝赤石脂湯

脱肛、子宮脱、子宮下垂

# 補中益気湯で治る疾患 (3/3)

加 白芷、辛夷、桔梗、  
慢性副鼻腔炎

加 蔓荊子、防風、白豆蔻  
緑内障

加 茯苓、芍薬、熟地黄、牡丹皮  
歯槽膿漏

合 小陷胸湯  
アダムス・ストロクト症候群



# 「出産後髪が抜ける」に補中益気湯

〔症例〕29歳、女性。

〔初診〕昭和62年11月。

〔現病歴〕昭和62年8月、第2子出産後、髪が抜けるようになった。皮膚科にも行き、いろいろ手当てをしたが無効であった。若いのに頭の毛がまばらになったと、ひどく悲観していた。

〔現症〕身長160cm、体重70kg。

〔経過〕補中益気湯を投与。頭髮は抜けなくなり、3ヵ月後には、すっかり毛が生えて、普通の頭になった。

〔考察〕補中益気湯は疲労虚弱を回復させる効果がある。

本例では出産は女性にとって大変な重労働であり、漢方の補剤を適宜使用することが望ましい。

# 脱肛に赤石脂湯<sup>(1/2)</sup>

〔症例〕42歳、主婦。

〔現病歴〕1ヶ月前から脱肛する。便通は2～3日に1行である。冷え症で、冬はしもやけができる。車酔いしやすい。

〔現症〕虚弱な体質で、皮膚筋肉が弛緩している。腹部では心下部振水音が著明で、臍上悸が強い。

〔経過〕補中益気湯加赤石脂 1.5、すなわち赤石脂湯を与えること14日間で治癒。あまり速やかな治り方にこちらが驚いたが、体質が治ったわけではなく、もうしばらく服薬を続けるように勧めたが、しばらく様子を見ると廃薬。

# 脱肛に赤石脂湯<sup>(2/2)</sup>

〔考察〕華岡青洲『瘍科方笈』「赤石脂湯。治真脱肛。」

浅岡宗伯『勿誤藥室方函口訣』赤石脂湯「痔疾蔵毒、及び真の脱肛を治す。即ち補中益気湯方中に赤石脂を加う。此の方は脱肛および蔵毒（腸出血を起こす疾病）下血に効あり。（略）升麻・赤石脂にて下部を静肅し、当帰、黄耆、白朮にて中気を扶助すれば、自然に下陷も防ぐ者と心得べし。」

荒木性次『新古方藥囊』赤石脂「味甘平、外来の刺激を防ぎ、爛れを復するを主る。故によく利を止どめ、血を止どむる等の働きをなす。」

清水藤太郎『薬局の漢方』赤石脂「桃花石ともいう。酸化鉄 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ を含むカオリン。収斂、止血、止瀉、吸着剤で、胃出血、胃腸病に用いる。」

大塚敬節『傷寒論解説』「私はかつて、脱肛の患者に、赤石脂の入った処方を用いたところ、一回飲んだだけで、ひどく胃がわるくなったと文句を云われたことがあった。」

なお、分量に注意。清水藤太郎は1日量5.0～10.0とするが、大塚敬節は1.5とする。

# 長びく咳に味麦益気湯<sup>(1/2)</sup>

〔症例〕72歳、婦人。

〔初診〕昭和60年9月。

〔現病歴〕今年1月にかぜをひいてから3か月を経過したが、咳がいつまでも治らない。疲れる。夜寝ていると、明け方に胸骨中央部でヒーヒー、ヒューヒューし、その部分に寝汗をかき、じとっとするという。某大病院を受診し、胸部検査で「気管支拡張症だから当分治らないよ」といわれた。

〔現症〕体が小さいが体重52kgはある。腹診上特別なことはない。平素は丈夫だが汗かきであるという。

〔経過〕味麦益気湯を投与。40日後には咳がまったく出なくなり、元気になって廃薬。

# 長びく咳に味麦益気湯<sup>(2/2)</sup>

〔考察〕『勿誤藥室方函口訣』医王湯「即ち『内外傷弁』の補中益気湯。○麦門(冬)、五味子を加え味麦益気湯と名づく。」

『傷寒翼方』「『正伝』補中益気加麦門(冬)五味子附子、一男素喘病あり、発熱惡寒し、喘甚だしく、短気し、脈洪盛にして実に似たるものを治すと。今籍りて以って前方(補中益気湯)の証の一等虚なるものを治して効あり。」(長谷川弥人『勿誤藥室「方函」「口訣」釈義』医王湯・備考)

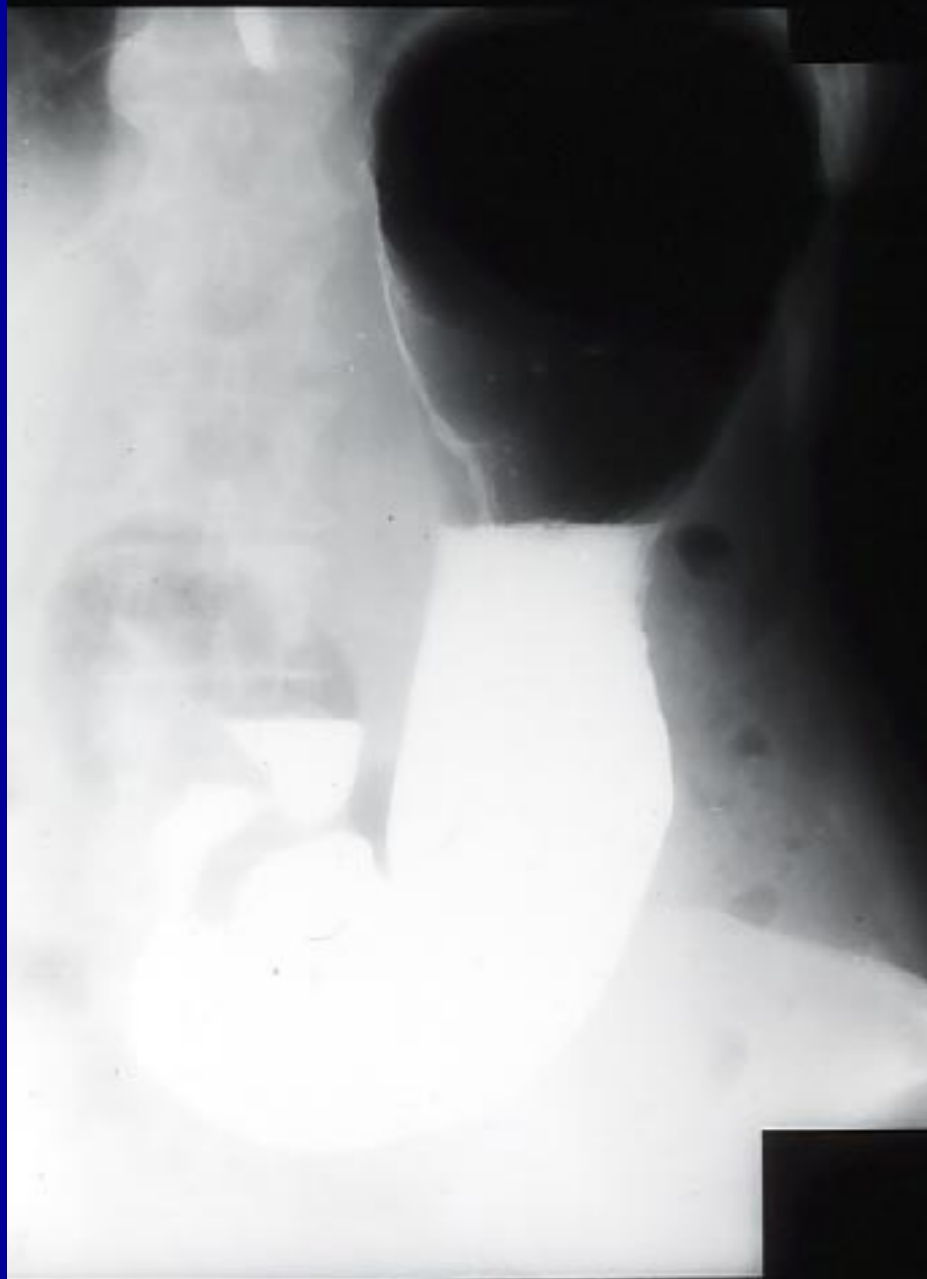
『麻疹心得統録』「味麦益気湯、疹後、内熱鬱蒸し、殆ど労状を為し、盜汗し、脈虚数なる者。」(同上)

『漢方診療医典』味麦益気湯「肺結核で咳嗽のある場合。」

『勿誤藥室方函口訣』生脈散(弁惑)「麦門(冬)、人参、五味子。精気を滋生し、真元を培養し、心を補い、肺を潤す。」

# 胃下垂・胃アトニー症の繁用処方

| 処方名  | 症状              | 胃下垂の程度 | 体質・体格   |
|------|-----------------|--------|---------|
| 茯苓飲  | 胃がはる・ゲップ        | 軽度     | 中等度     |
| 六君子湯 | 食欲不振・もたれ        | ↑      | ↑       |
| 四君子湯 | 顔色不良・気力がない      | ↓      | ↓       |
| 人參湯  | 全身的機能低下傾向、冷え・下痢 | 高度     | 弱       |
| 安中散  | 胃の痛み・やける        | 軽度     | 中等度～やや弱 |







# 補中益気湯加減

- 頭痛には蔓荊子を加う。
- 痛甚だしきには川芎を加う。
- 頂き痛み脳痛むには藁本、細辛を加う。
- 諸々の頭痛並びにこの四味を用いて足れり。
- 痰厥の頭痛には半夏、生姜を加う。
- 額痛むには白芷、葛根、升麻を加う。
- よくくしゃみする者、腠理密ならずして外邪に搏たるる に白芷、川芎を加う。

# 補中益気湯加減

- 耳鳴り目黄頤脹れ、頸肩腕肘痛み、面赤脉洪大ならば羌活、防風、藁本、甘草を加えてその経血を通じ、黄芩、黄連を加えてその脹れを消し、人参、黄耆を加えて元氣 を益す。
- のど痛み頤脹れ脉洪大にして面赤きには黄芩、甘草、桔梗を加う。
- 口渇きのど渇くには葛根を加う。
- 夏の咳嗽には五味子、麦門冬を加う。
- 冬の咳嗽には根節を去らず麻黄を加う。秋の涼にもまた 加う。

# 補中益気湯加減

- 春の空温かなるには甘草、款冬花を加う。
- 嗽には桑白皮、五味子を加う。
- 久しき病に痰ありて嗽し肺に伏火あらば人参を去る。
- 食下らざるはすなわち胸中胃上に寒あり、或は気渋滞せば青皮、木香、陳皮を加う。
- 冬は益智仁、草豆蔻を加う。
- 脇の下痛み、或は脇の下満急せば柴胡、甘草を加う。
- 臍下痛むには熱地黄を加う。もし止まざるものは大寒なり。肉桂を加う。

# 補中益気湯加減

- 虚勞発熱には升麻を去って半夏、茯苓、黄芩、地骨皮、五味子を加う。
- 陰虚火動には黄柏、知母を加う。
- 酒を飲む人元氣虚弱にして力なく、飲食減少面紅きは半夏、芍薬、葛根、神曲、麦芽、枳殻を加う。
- 小便閉には麦門冬を加う。
- 大便結せば桃仁、麻子仁、紅花を加う。
- 元氣虚弱にして腰痛むには黄柏、知母、牛膝、芍薬を加う。
- 夢遺には牡蛎、竜骨を加う。

# 補中益気湯加減

- 男婦骨蒸勞熱には芍薬、五味子を加う。
- 内傷気虚自汗久しく止まざるには附子、麻黄根、浮小麦を加う。
- 十指ことごとくしびれ、並びに面目遍身皆しびるるはこれ気虚なり。  
木香、香附子、麦門冬、羌活、防風、烏薬 を加う。
- 咽喉腫痛口舌蒼を生じ勞していよいよ盛んなるはこれ内傷不足に属す。  
玄参、黄柏、知母、桔梗を加う。
- 中気不足詠虚微、気相続かずしゃっくりを発せば人参、麦門冬、五味子、  
黄柏を加えて気を降し、或は少し附子を加う

# 補中益気湯加減

- 下部に力なきには牛膝、杜仲を加う。
- 足弱きには木瓜、防已を加う。
- 泄瀉には芍薬、沢瀉、茯苓を加う。
- 汗多きには升麻、柴胡を去って酸棗仁を加う。夜眠ること難きにもまた加う。
- 精神短少ならば人参、五味子を加う。
- 心を用ゆること太過し神思安からず、或は怔忡驚悸せば 茯神、遠志、酸棗仁、石菖蒲、柏子仁を加う。
- 大病の後に元氣未だ復せずして胸満氣短くば陳皮、枳実、芍薬を加う。

# 補中益気湯加減

- 気虚して汗あり潮熱する者、或は内傷発熱する者に並びに用ゆ。
- 婦人勞によって耳鳴り頭痛身倦む。これ気の不足なり。  
麦門冬、五味子を加う。
- 孕むこと89ヶ月にして胎下墜、或は動き、面黄に身倦み飲食少きは  
これ脾気の虚弱なり。白朮を倍し、再び蘇 梗を加え三十余劑にして安し。
- 婦人交接するごとに出血して痛む。これ肝火脾を動かす。  
この湯に酒芍薬を加えて癒えたり。
- 金瘡腫痛出血止まず寒熱し口乾くは、これ気虚して血附く処なき故なり。  
五味子、麦門冬を加う。

# 補中益氣湯加減

- 小児の諸々の疳、癖塊久しく治しても愈えざるに多く服して尤も効あり。
- 痘瘡に痂を結んで誤りて風寒に犯され悪寒して発熱するに尤も宜し。
- 酒慾過傷して淋をなす者にこの方を用いて元気を補う時は水道運行す。故に淋起らず。



# 補中益気湯加減

按ずるに内傷不足清気下陷を治するの方なり。蚤歳の頃一応の不食頭痛発熱四肢倦怠に与えて時々人に悩まし、且つその証を重くし眩暈生じ胸塞がる。それより以来詠と眼精とを察して益気湯を与うべきの法を知るなり。詠洪大にして数、緩大にして力なく、急大にして数、時に一洩す。これすなわち脾肺の虚詠なり。眼色見はり弱く虚然として精なし。これその症なり。

# 補中益氣湯加減

- 一切の病後元氣いまだ服せずして瞳に精なく詠虚大ならば宜しく使うべし。加減消息して調理す。
- 傷寒愈えて後に労力によって再発し、その証頭疼み痛み寒熱往来腰腿しびれ痛み沈因して力なきに黄柏、羌活、防風を加う。もしいまだ効あらざるには附子を加えて補薬の力を運らす。これを加味益氣湯と名づく。
- 傷寒愈えて後沐浴をなして風に感じ再び発熱し元氣虚せば加味益氣湯に宜し。
- 傷寒愈えて後に元氣いまだ復せず、ここにおいて房労を犯す時は必ず小便澁り肌熱し沈因す。本方に附子を加えて奇効を得。

# 補中益気湯加減

- 平素不足し労役内傷を兼ね風寒を挟み暑を挟んで瘧疾を一致し寒熱交わりおこり肢体倦怠するに黄耆、芍薬、半夏を加う。
- 痢疾久しく愈えず、床に起つこと能わずして不食し疲弱の甚だしきには芍薬、木香、砂仁を加え柴胡を去る。
- 婦人風毒腫愈えて後上下に流注して腫痛し躰瘦せ力なく発熱し、不食するにこの方与う。腫痛上にあらば独活を加え、下にあらば羌活を加え愈ゆることを得る。按ずるにその流注するというのは初め発散の剤不足なる故なり。
- 金瘡腫痛しその口開く時はこの湯尤も宜し。その口閉づる時は茯苓補心湯を用ゆべし。癰疽もまた然り。

# 補中益気湯加減

- 内傷気虚の症に盗汗止まずして乾咳肌熱を兼ねるには本方に酸棗仁、麦門冬、熟地黄、黄柏を加う。
- 予が父八十才の時、冬大小便通ぜず茎中及び肛門甚だ痛み数方効あらず。故に気海に灸す。翌朝小腹腫起するこ と三寸ばかり、二穴痛み益々甚だし。これによりて予喟 然として医王の煎汁を以て六味丸を与う。しばらくありて小水通じ夜に至りて燥屎下る。終に四五日にして安し。
- 一男面白くして「鼻塞り」香臭を聞かざること三年予肺 気の虚として麦門冬、山梔子を加えて愈ゆ。(原文「鼻に 清涕を流す」とする)

# 補中益気湯加減

- 半産気虚し下血止まずして昏暈し人事を知らざるに川芎、干姜を加う。
- 産後下血盡きざるに当帰湯、四物湯の類を与えて止まず。故にこの湯を用いて奇効を得たり。一切の下血、或は崩漏帯下の類に気弱く躰倦むことあらばこの湯を与うべし。
- 或人語りて云わく。痛風百節の痛むには藁本、羌活、防風、牛膝、杜仲を加う。痛止む時は加味を去って本方を用ゆと。

# 【症例1】 M.K. 26歳 女性

主訴：腰痛、胸背部痛、手の痺れ。

既往歴：昭和54年頃から38℃台の不明熱と関節痛および無月経が続き、某医大で検査、膠原病の疑いがあった。その後視神経炎などで入院、症状としては大量の鼻出血や血尿といった出血傾向、37℃台の不明熱があり、全身の骨痛と関節痛がみられた。視神経炎の治療はステロイドで軽快するも中止すると血管炎が増悪し、大量の鼻出血などを繰り返した。

昭和60年5月頃より緑内障がみられ上記の症状に加えてステロイドの副作用である糖尿病や骨粗鬆症やうつ病が現れた。昭和61年7月、緑内障のため眼圧を上げる抗うつ剤では失明の恐れがあり使用できないので、漢方療法でうつ病の治療ができないかと言うことで紹介された。

脈は沈小で力があり、腹部には胸脇苦満を認め小腹硬満が見られるが腹力は全体に軟弱で虚満していた。殆ど喋りたがらずベッドに沈み込んだ状態であった。加味帰脾湯を投与2ヶ月目には大分喋れるようになった。9月末には活動的になりうつ病はよくなった。尚眼圧には変化は見られなかったとのこと。

その後昭和63年10月ごろより主訴が出現、身長も151cmから147cmと低くなり、胸椎および腰椎の圧迫骨折が認められた。そのため将来を悲観してまたうつ状態になり来院した。ステロイドの減少によりムーン・フェイスはとれ、腹部も細くなったが肥満線が見られ、軟弱無力であった。

十全大補湯と帰脾湯とを1日置きに服用するよう処方。昭和63年12月1日には痛みは時々でるが以前のような激痛は少なくなった。12月15日には普通の状態では痛みを感じないが不眠傾向が見られた。その後暫く受診せず平成元年2月に胸痛が再発したためまた服薬し始め以降痛みも改善し日常生活に支障来さぬまでになった。

# 虚証の風邪

日常診療の中で麻黄附子細辛湯や桂姜棗草黄辛附湯の使用例は虚弱化と共に毎年増加しています。ゾクツとして2日間は無症状でそれから咽喉チクの症状が出て、その後、くしゃみ、鼻水、咳となり、その後グズグズして治ったかと思うと又ぶり返す万年風邪症候群やアレルギー性鼻炎が増えております。最初の5日間は麻黄附子細辛湯の時期であり、それ以降は桂姜棗草黄辛附湯の適応であることが分かってきました。



# 麻黄附子細辛湯（まおうぶしさいしんとう）

麻黄 4.0、細辛 3.0、附子 1.0

## 1. 原典の指示

[原典]『傷寒論』少陰病篇

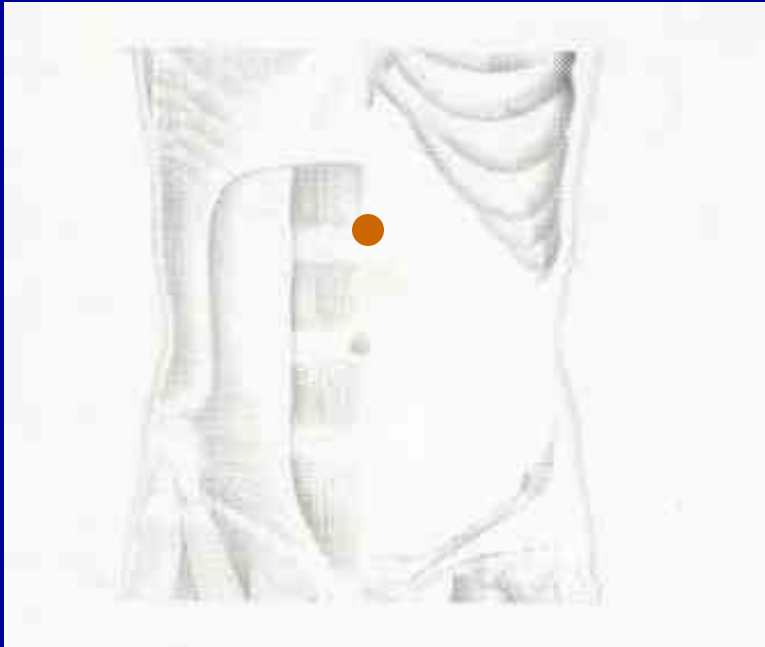
[本文]少陰病、始め之を得て、反って発熱し、

脈沈の者は、麻黄附子細辛湯之を主る。

# 麻黄附子細辛湯が有効な疾患

感冒、頭痛、インフルエンザ、気管支炎、神経痛、急性・慢性結膜炎、トラコーマ、急性腎炎、肺炎、喘息、蓄膿症、クインケ浮腫、関節リウマチ、腰痛症、アレルギー性鼻炎

# 中脘痛



麻黄附子細辛湯の適応がある  
場合、中脘に圧痛がみられる。  
（「活」に中脘痛の記載がある）

# 桂枝去芍藥湯

腹証奇覽の桂枝去芍藥湯の図の説明に「臍上の動気上って胸を衝き胸満す」とあり、本文では「図の如く、腹中濡にして拘攣なく、胸満して上衝し、また腹中力なくおぼう。あるいは下剤をもって下して後、必ず上衝胸満して腹力なく覚ゆるものあり。この方を用ゆれば腹中和して快癒なるなり。」

傷寒論に「太陽病、之を下して後、脈促、胸満のものを主る」

桂支去芍藥湯之圖



「臍上動氣上ヲ心ヲ  
衝キ胸滿ス」

# 桂姜棗草黃辛附湯

原典 金匱要略

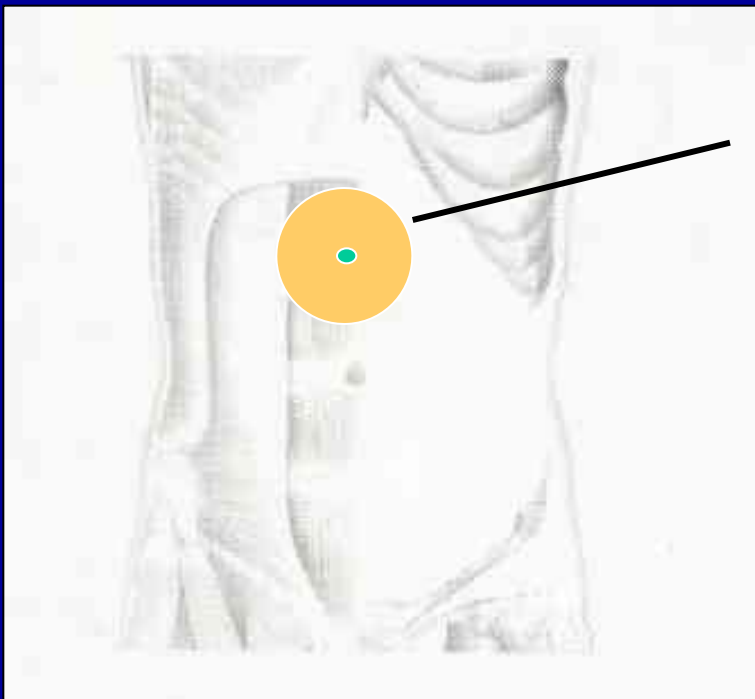
氣分。心下堅大盤の如く、辺旋杯の如し。

水飲の作す所、桂枝去芍薬加黄辛附湯之を主る。

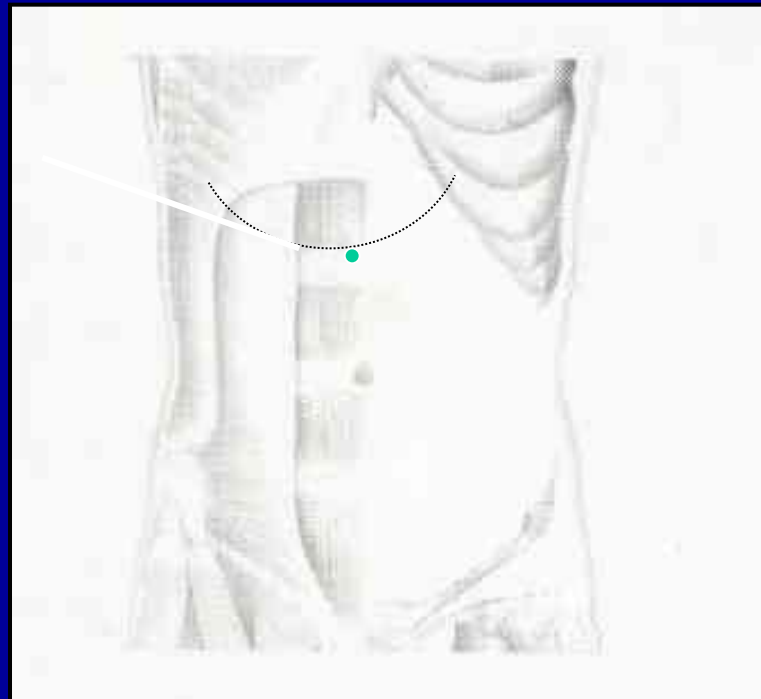
「氣分では、心下部が堅く、碗を伏せたように隆起して、中央が高く、周りが低くなっている。これは水飲の作すところで、桂枝去芍薬加麻黄細辛附子湯の主治である。」

桂枝 3両 生姜 3両 甘草 2両 大棗 12枚 麻黄 2両  
細辛 2両 附子 1枚

# 中脘痛



中脘痛



桂薑東<sub>レ</sub>草黃辛附湯之證

附<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>湯<sub>レ</sub>證<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>堅<sub>レ</sub>塊<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>  
結<sub>レ</sub>塊<sub>レ</sub>血<sub>レ</sub>塊<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>論





## 桂姜棗草黃辛附湯（腹証奇覽）

図の如く心下に毒あり。その形円なり。所謂盤の如く辺り旋杯の如きものこれなり。これを按ずるに堅くして大承氣湯の堅塊に似たり。然れども大承氣の堅塊はその形長きを以てこれを別つ。又図の如く心下堅大なるものに枳朮湯の證あり。これその外證に依ってこれを別つべし。

# 桂姜棗草黃辛附湯 との出会い

桂姜棗草黃辛附湯は、お経のような実に耳障りの良い名前の処方であります。

最初の出合いは恐らく漢方を勉強し始めた時、『類聚方広義』の中に、桂枝去芍薬加麻黄細辛附子湯が出ており、それが桂姜棗草黃辛附湯とも言うのだと習ったのが最初の出会いはなかったかと思います。

# 山田光胤先生の使い方

著書「漢方処方応用のコツ」に桂姜棗草黄辛附湯ついて、「典拠と指示」「方意を探ぐる」「用い方」について詳しく書かれており、先生はこの処方の第一人者であろうかと思います。今回のお話もその延長線上で、言い足りない所は、お読み頂ければ幸いと思います。最近冷えの人が多くみえ、日常茶飯事に処方する機会が多いので反省の意味も込めて検討してみました。

# 桂姜棗草黃辛附湯 使い方のコツ

室賀昭三先生が風邪気味の時に、山田光胤先生が「麻黄附子細辛湯ですか？」とお尋ねになったら、室賀先生が「この位になると桂姜棗草黄辛附湯でないとだめです」といったお答えになり、それで桂姜棗草黄辛附湯の使い方が分かったと十数年前、山田先生からお教え頂きました。

# 浅田宗伯先生の『勿誤藥室方函』

「ここに一奇説あり。仙台工藤球卿曰く、およそ大氣の一転は万病を治する極意なるに別して血症の治に專要とせり。昔年一婦人労咳を患う。咳血氣急、肌熱手を烙く如く、肌膚削脱し脈細数なり。余視て死症とす。一医見て治すべし、桂姜棗草黄辛附湯を用いて全く癒えるを得たり。余大いに敬服して、これに倣って大氣一転の理を發明し、乳岩、舌疽、及び諸翻花瘡等数十人を治し得たり。翻花瘡に黄辛附湯を用いたる意は、陰陽相隔たりて氣の統制なき故、血肉その交を失って漸々頑固し、出血にも至るなりとして、金匱の陰陽相得れば、その氣乃ち行き、大氣一転その氣乃ち散ず、と言うに本づきてこの湯を擬したるなり。一婦人、乳岩、結核、処々麤爛し、少しく翻花の兆しあり、時々出血す。戊午初春に至りて疼痛甚だしく、結核増長して臥床にあり。正月二十八日黄辛附湯を与え、四、五日疼痛退き、結核減じ、床を起きて事を視ること平日の如し。すべて陰陽相得ずして咯血、吐血顔色脱してなすべからざるに、この湯を与えて起死回生を得しことありと。余謂らくこの湯のみ限らず、すべて古方はこの意を体認して運用するときは。変化窮まりなきの妙を得べし。」

# 藤井美樹先生の自家経験例

「数年前に症候性の三叉神経痛を起こして入院したことがあるのですが、それから大分たちましてですが、田舎に貸地のこと等で色々難しいことがありまして、非常に悩みましたが、その時風邪を引きましたら、顔面が痛くなりまして、涙がボロボロ出まして、三日くらい休みまして、少しよくなってから中将湯ビル診療所に出てきたのですが、冷たい風にあたりましたら、又痛くなりまして困っていましたら、薬局の高橋さんが脈を診られまして、「これは桂姜棗草黄辛附湯だ」と言われまして、煎じてもらって飲んだのですが、飲んでほんのしばらく経ったとき、今まで寒かった背中に、丁度「虫の行くが如し」といった、ムクムクといった感じがしまして、暖かくなって、そのうちに鼻の脇がムズムズとして、今までは幾らかんでも全然鼻が出て来なかったのに、喉の方にグーッと下ってきまして、慌てて吐きましたら、血と膿がドクドク出てきました。そして、それと同時に腫れていたのがスーッと取れた、目が開けられるようになり、痛みも取れてきました。あまり劇的に効いたので、びっくりしてしまいました。その後にも蓄膿の人に使ったことがあります。」

# 相見三郎先生の治験

「気分の症状としては骨痛むの証がある。気分の証は桂姜棗草黄辛附湯であるが、私自身はこれを腰痛に用いている。これは自らの体験によって確かめ得たからである。

ある時対人関係で悩んだことがあった。相手は目上なので、面と向かって交渉するわけにもいかず、そうかといってあきらめて引っ込む筋合いのことでもない。とつおいつ思い悩んでいると突如として腰痛を起こした。起き上がることも出来ず這いずっていたが、桂姜棗草黄辛附湯を飲んだところ、その翌日には拭うがごとく腰痛は治ってしまった。そこで陰気の通じないための腰痛だったことがわかったのである。」

『漢方の心身医学』

# 蓄膿症の自験例

「高校生の時に慢性副鼻腔炎の手術をしたが、完治せず、しばしば、風邪などの感染症の悪化に伴い副鼻腔炎も悪化していた。

過労が続き、その内三叉神経第二枝のところが腫れて疼痛が出て来た。副鼻腔炎の再発と思い、葛根湯を使ったが、改善せず、痛みは益々強くなり、心配になり、CTを撮ったところ、膿瘍がしっかりと出来ており、排膿しないと痛みが取れないと覚悟を決め、後輩の耳鼻科医に診てもらい、穿刺して貰ったが、少しか出ず、考えて桂姜棗草黄辛附湯を飲んだところ3日で腫れも引き、痛みも取れた。」これは藤井先生の顰に倣ったものである。



# マタニティーブルーの症例 No1

[症例] R.N 38歳女性 主婦

[初診] 平成6年11月。

[主訴] 右首から背中に掛けて痛い。肩凝り。右腕に冷えが走っている様に思える。冷え。思い詰めては吐きそうになる。

[既往歴] 昭和55年10月 第1子出産前に不安になった。

昭和58年8月 第2子出産後の不安。

昭和60年10月 鬱状態。

と問診票に記載されていた。

[現病歴] 平成6年10月より上記主訴が始まる。現在は他の病院で鬱状態の治療を行っているとのこと。

[現症・経過] 身長146cm 体重 51kg、便通は1日2回で便、食欲は普通、睡眠も取れている。体調は1日中悪い。

10月頃より落ち込む。寒さと共に減入って来るとのことである。脈は沈微で気虚を呈しているが特徴はみられない。腹診ではやや心下濡であるが胸脇苦満は見られない。振水音もなく、腹部動悸も触れない。胃下垂でもないが、中脘痛が見られる。帰脾湯と言う考えもあったが、これは気分であろうと考えて。エキスで桂枝湯と麻黄附子細辛湯を2週間投与した。

2週間後にきっちり来院。顔つきは初診時よりも暖かみを感じる。体重が2～3kg減り、51kgから48～49kgになってお腹のだぶつきが無くなった。身体が引き締まってきたと喜んでおり、落ち込みについて聴くと、大分楽になり、仕事にいても楽との答え。右腕や肩の痛みには何も話がない。大分様子が違う。もう2週間出して様子を見ることにした。2週間後に来院。前と全然違う、もう大丈夫ですとのこと。脈も沈小となり、廃薬とした。

# 化膿性歯根炎の症例

No1

[症例] M、K 45才 女性 自営業

[初診] 平成4年5月。

[主訴] 身体に力がない。腰痛、歯痛、肩痛み

[既往歴] 昭和49年3月出産時大出血。輸血歴あり。

昭和49年4月子宮摘出術。抗生物質で3度死に損なった。以来抗生物質は怖くて飲めない。

[現症・経過]身長160cm、体重49kg

3人姉妹の真ん中で、疲れ易く、一寸したことで疲れて夫婦で外出もできない。皮膚は敏感でカブレ易い。腹診では軽い胸脇苦満が見られる。補中益気湯を投与。暫くしてから浮腫むと言うことであった。姉妹も甘草1g以上になると浮腫んでいるので、甘草を0.5gとした。これで順調よく翌平成5年10月まで過ごした。最近では歯医者も見えてくれるようになったと喜んでいた。その月末に右下顎を腫らして来院。歯科で、抗生物質の合うのを見付けてくれなければ治療できないと言われたとのこと。桂姜棗草黄辛附湯を投与。2日して口の中に粘液が張り付いてペッペッとしても取れない状態になり、粘液が沢山出て、その後膿がドッと出て歯齦膿瘍は終わったとのことであった。抗生剤も飲まずに治った症例である。

# 真武湯(しんぶとう)

茯苓 5.0、芍薬・朮 各3.0、乾生姜 1.0、附子 1.0

## 1. 原典の指示

[原典]『傷寒論』

[本文](1)太陽病中篇

太陽病、汗を発し、汗出でて解せず、其の人なお発熱し、心下悸、頭眩、身じゅん動、振振として地に擗れんと欲する者は、真武湯之を主る。

(2)少陰病篇

少陰病、二三日已まず、四五日に至って、腹痛、小便不利、四肢沈重疼痛し、自下利す。其の人或いは咳し、或いは小便利し、或いは利せず、或いは嘔する者は、真武湯之を主る。

# 真武湯が有効な疾患

腸チフス、赤痢、下痢、腹痛、インフルエンザ、  
黄疸出血性レプトスピラ病、肺炎、肺結核、胸  
膜炎、低血圧症、胃アトニー症、慢性腸炎、  
虫垂炎、腹膜炎、眩暈、メニエール症候群、麻  
疹、更年期障害、冷え症、蕁麻疹、湿疹、皮膚  
掻痒症、帯状疱疹、慢性腎炎、脳出血